

國學院大學學術情報リポジトリ

湯原王と娘子の贈答歌：
佗族の歌掛けのシステムから考える

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 曹, 咏梅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000810

湯原王と娘子の贈答歌

— 侗族の歌掛けのシステムから考える —

キーワード

湯原王 娘子 行歌坐夜 対歌 歌路

一 はじめに

湯原王の娘子に贈れる歌二首 志貴皇子の子なり

① 表辺なきものかも人はしかばかり遠き家路を還す思へば (巻四・六三二)

② 目には見て手には取らえぬ月の内の楓のごとき妹をいかにせむ (六三二)

娘子の報へ贈れる歌二首

③ ここだくも思ひけめかも敷栲の枕片去る夢に見えける (六三三)

④ 家にして見れど飽かぬを草枕旅にも妻とあるが羨しさ (六三四)

湯原王のまた贈れる歌二首

⑤ 草枕旅には妻は率たれども匣の内の珠をこそ思へ (六三五)

湯原王と娘子の贈答歌

曹
咏
梅

⑥わが衣形見に奉る敷袴の枕を離けず巻きてさ寝ませ (六三二六)

娘子のまた報へ贈れる歌一首

⑦わが背子が形見の衣妻間にわが身は離けじ言問はずとも (六三七七)

湯原王のまた贈れる歌一首

⑧ただ一夜隔てしからにあらたまの月か経ぬると心いぶせし (六三八)

娘子のまた報へ贈れる歌一首

⑨わが背子がかく恋ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねえすけれ (六三九)

湯原王のまた贈れる歌一首

⑩はしけやし間近き里を雲居にや恋ひつつをらむ月も経なくに (六四〇)

娘子のまた報へ贈れる歌一首

⑪絶ゆと言はば侘しみせむと焼太刀のへつかふことは幸くやあが君 (六四一)

湯原王の歌一首

⑫吾妹子に恋ひ乱れたり反転に懸けて縁せむとわが恋ひそめし (六四二)⁽¹⁾

『万葉集』巻四の相聞に収録されている湯原王と娘子の贈答歌群 (巻四・六三一―六四二) は、最後の湯原王の歌以外では、題詞は「湯原王の娘に贈れる歌」、「娘子の報へ贈れる歌」、「湯原王のまた贈れる歌」、「娘子のまた報へ贈れる歌」の形式を取っており、男女の交互唱の性格が強く表れている作品である。六四二番歌は「湯原王の歌一首」という題であるが、歌群を締めくくるものと思われ、本論ではこの十二首を一つの歌群と見ていきたい。

諸注釈書では従来から王の実際の恋愛と見る解釈も多くあったが、一方『私注』は「歌の贈答を楽しんだ」といい、『釈注』も「一二首がおそらく虚構の作品であつた」⁽³⁾と捉えている。渡辺護氏も「試みに事実という観念を取り去って湯原王と娘子の歌を見つめ直すと、そこには従来の解釈では窒息させられていたと思われる歌による遊びの楽しさが息づいてくるような気がする。」⁽⁴⁾と述べ、歌群に物語性、遊戯性を認める論が展開されている。辰巳正明氏は『玉台新詠』や中国少数民族の対歌との関係の中から、

この二人の贈答歌は、明らかに一連の継続性を保ちながら歌われたものである。それは二人の交互唱による恋人情歌がその基盤としてあることを示唆しているものである。しかし、その恋人情歌は第一段階のそれではなく、次の段階へと展開している恋人情歌であり、湯原王という貴顕の登場によって、そこには文芸的な様相が見えてくる。このような遊戯性の強い恋人情歌を歌うことが可能であったのは、歌われた場が貴顕の文芸サロンであったことによるからであろうし、この歌群はその場に公開されることで成立した、いわゆる《社交情歌》であったことによるものと思われる⁽⁵⁾。

と述べ、「定情以後の離別」は『玉台新詠』の情詩の基本的な歌路（初逢―相思―定情―離別―怨）であり、それが怨情の世界を形成するのである。そのような流れの中に湯原王と娘子との恋があったということである。」と述べて、贈答歌における歌の展開が『玉台新詠』の情詩や少数民族の「歌路」を踏まえる恋人情歌と対応することを指摘する。佐野あつ子氏も『玉台新詠』との関係の中から辰巳氏の論を具体的に検証し、「一首一首が主体的に『玉台新詠』と対応している」と述べている。本論では、この辰巳氏の論を踏まえながら、中国侗（トン）族の「行歌坐夜」（妻問いの習俗）で歌われた対歌を例に取り上げて、湯原王と娘子との贈答歌群の成り立ちについて考えてみたい。

二 歌群の構成

湯原王はまず①で相手に遠い家路を帰されることを先に怨み、相手に断られるであろうことを想定して詠む。門前で還される状況を詠む歌は同伴家持の、

かくしてやなほや退らむ近からぬ道の間をなづみ参来て（巻四・七〇〇）

吾妹子が屋戸の籬を見に行かばけだし門より返してむかも（巻四・七七七）

ぬばたまの昨夜は還しつ今夜さへわれを還すな路の長道を（巻四・七八一）

と見え、七〇〇番歌は「娘子の門に到りて作れる歌」を題とする歌で、七七七番歌と七八一番歌は「同伴宿衾家持の、また紀女郎に贈れる歌五首」の中の一首目と五首目にあたる。このように「遠き家路を還す思へば」、「門より返してむかも」、「われを還すな」などと、門

前で帰される状況を詠むのは、妻問いの時の歌い方の形式として存在したことが知られる。⁽⁷⁾ 家持や湯原王が門前という場面を設定して、相手が自分を帰すことを想定して歌うのは、帰されることを予測した上で、先回りして相手に先手を打つ方法である。また湯原王も家持も「遠き家路」、「近からぬ道」、「路の長道」などと距離の遠さを強調して詠む。これははるばる遠い所から難儀してきたにもかかわらず、帰してしまう女性の冷淡さを非難する方法である。さらに、ここには遠方から訪ねてくるほどの、評判の高い女性であることを賛美する意が含まれていると思われる。このように湯原王は妻問い習俗の最初の場面を設定して、わざわざ挑発と賛美の意を併せ持つ歌を贈ったのである。

②では、妹を月の中に生えているという桂樹に喩えて、妹を手にとることができないと詠み、相手が得がたい女性であると賛美する。この歌も挨拶的な誘い歌と捉えられる。この歌は契沖以来の諸注釈書で指摘する通り、月の中に桂があるという中国の伝説に基づいたものであり、また「手には取らえぬ」は、陸士衡の「安寝北堂上、明月入我牖、照之有餘暉、攬之不盈手」の詩が典故として指摘されている。⁽⁸⁾

この二首に対して娘子は③④の歌で返す。③の「枕片去」は集中ではこの一例のみであるが、「敷櫓の枕」は「玉藻刈る沖辺は漕がじ敷櫓の枕の辺忘れかねつも」(巻一・七二)、「敷櫓の枕をまきて妹と吾寝る夜は無くて年を経にける」(巻十一・二六一五)と見え、恋歌では男女の共寝を意味するものとして用いられる。③ではしきりに恋い焦がれたことで、夢にあなたが見えた、相手を受け入れるような心情を詠む。「夢に見え」は②の「目には見て」と対応し、③は②について返した歌である。一旦相手を受け入れたかに見えたが、しかし④では家にいる自分と、草枕の旅に連れていった奥さんを引き出して怨み、湯原王を追いつめる。もちろん湯原王には妻がいるかどうかではなく、娘子によって妻がいることに設定されているのである。娘子は意図的に湯原王を苦しい立場に立たせて、彼の答えの歌を導こうとしているのである。

これに対して湯原王は⑤⑥の歌で返す。⑤の「匣内の珠」は、集中に「白玉を手には纏わずに箱のみに置けりし人そ玉詠かする」(巻七・一三二五)とあるように、大切な女性を意味するもので、⑤では旅に妻は連れていったけれども、心の中では匣の内の珠のように大切なあなたを思うのだと弁解し、娘子の④に答えたのである。さらに⑥では形見の衣を差し上げるから、夜床の枕べに離さず身につけておやすみなさいと贈る。「敷櫓の枕」は③の「敷櫓の枕」を受けたものである。「衣」は集中に多く詠まれており、「吾妹子が形見の

衣下に着て直に逢ふまではわれ脱かめやも」(巻四・七四七)、「とほるべく雨はな降りそ吾妹子が形見の服われ下に着り」(巻七・一〇九一)などあるように、形見の衣を下に着ることは秘めた恋人関係を表すと同時に、それを自分の肌に密着させて着ることは男女の共寝を想起させる。また逢う日までに衣を身につけることは、心変わりなく再会を約束するもので、相手へ愛の忠誠を誓ったことと考えられ、形見の衣の交換は共寝へと向かう恋人関係にあることを意味する。湯原王はそのような形見の衣を贈り、愛を誓ったのであろう。

これに娘子が⑦で、あなたの形見の衣は妻問いをしてきたあなただと思って我が身から離さないと歌うことから、二人の関係は形見の衣を交換し、契りを結ぶ関係になるのだが、娘子は最後に「言とはずとも」と付け加える。「言問ふ」はことばをかける意であるが、集中の恋歌では、「妹があたり今そわが行く目のみだにわれに見えこそ言問はずとも」(巻七・一二一一)、「味さはふ目は飽かざらね携り言問はなくも苦しかりけり」(巻十二・二九三四)」と詠まれ、愛のことばをかける意で用いられている。⑦の「言とはずとも」は、形見の衣は何も物を言わぬものとしての意と、さらに相手が自分に愛の言葉をかけてくれない、つまり自分のところに訪ねてこないことを責め立てる意が隠されている。

このような娘子の咎めに対して湯原王は⑧で、たった一夜だけ逢えなかったのに一月が経ったかのように心が和まないと、娘子への恋の思いを詠みながら、訪れなかった日はたった一夜だけだと弁明する。これに娘子は⑨で、あなたが恋い慕って下さるので、眠られずに一夜を過ごしたと返す。

これに湯原王は⑩の歌で返す。「間近き里を雲居にや恋ひつつをらむ」と、逢えない嘆きを訴える。「雲居」は集中に「遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒」(巻七・一二七二)などあるように、雲のような遙か遠くの場所を指し、またそれは妹との距離の遠さを表す。あなたのいる近き里を雲居の彼方のように恋い続けると、愛の思いを伝えるようであるが、実は「雲居」を用いることで妹との距離が離れていることを暗示し、また「月も経なくに」と詠むことには、二人がそれぐらい離れたことを意味する。このように距離的にも時間的にも二人の離れた関係を詠むことで、二人の恋の関係を終結へと向かわせようとする意図が読み取れる。

湯原王の真意を察知した娘子は、⑪でうわべだけのことをいう相手を非難し、二人の関係はここで終わりを迎える。最後の⑫は前歌の男性の持ち物である「焼大刀」に対して、女性の用いる「反転」(糸紡ぎの道具)を用いて前歌を意識し、二人の恋を振り返りながら嘆く歌で歌群を閉じている。

このように当該歌群は相手への挑発と受け入れの関係を交互に繰り返しながら、相手の真意を探り合う方法により展開していることが知られる。ただ、形見の衣を贈って相手と契りを結ぶことへと展開しつつも、結果的には二人の別離へと向かうのである。当該歌群には漢籍の影響が見られ、また『玉台新詠』の情詩との対応関係も指摘されており、こうした二人の贈答歌には、『遊仙窟』を背景とした歌遊びが下地にあることが考えられる。⁽¹⁰⁾このように当該歌群は漢文の知識を共有する歌の場で披露された贈答歌であつたと考えられる。湯原王と娘子が中国の恋愛文学を駆使して贈答を楽しんだことは言うまでもなく、大事なことはここに恋愛の道筋を踏みながら一定のテーマに沿った歌が交互に交わされて展開することである。こうした恋愛の過程を踏む歌い方は、歌掛けの場で展開するものと思われ、このような歌の方法は中国少数民族の対歌文化に見ることができる。

三 侗族の「行歌坐夜」と歌掛けのシステム

中国西南、西北の少数民族地域には歌掛けの文化が広く存在する。中国では歌掛けを「対歌」という。男女の対歌は即興で行われるが、思うままに歌を返すのではなく、歌唱システムが存在し、それに基づいて対歌を持続させることが知られる。歌唱システムとは歌の定式、または歌の順序のことであるが、辰巳正明氏は「壮族の情歌に一定の定式があり、民間ではこれを《歌路》と称している。歌路を分類すると、初会、探情、賛美、離別、相思、重逢、責備、熱恋、定情などの順序である。」を引用し、恋歌の定式を「歌路」と称している。⁽¹¹⁾さらに、こうした歌路の存在が認められる民族としては、壮族のほかに、

布依族 相会・相思・相愛・失恋・光棍・鷄鳴・逃婚・請媒

京族 初会・挑逗・探情・賛美・情深追求・分離・相思・同心・怨

仫佬族 邀唱・挑逗・初逢・問村・賛美・訴情・追求・約会・問定情・分離・想双・同家住・單身憂・怨責

毛南族 試喉・邀請・見面・賛美・試探・嘆身・挽留・熱恋・悔恨・猜疑・欲嫁・囑咐・離別・逃婚

水族 青春・惜春・見面・分別・約会・求愛・想念・定婚・苦情・分離・逃婚

羌族 試探・賛美・求愛・定情・熱恋・盟誓・失恋

苗族 模底・贊美・相恋・求愛・成双・失恋・逃婚・離婚・控訴・單身

などをあげている。⁽¹²⁾ 中国西南地区に住む侗族も北部方言地区の玩山（山の歌垣）の時には「初会歌・借把凭歌・初相連歌・相思歌・久伴歌・成双歌・失恋歌」などの定式が存在するという。⁽¹³⁾ 「行歌坐夜」とは南部方言地区の対歌習俗である。主に農閑期に盛んに行われ、日が暮れると青年たちが、娘たちの集まる家を訪れて室内で対歌をしながら夜を過ごす、一種の妻問い習俗と恋愛習俗である。この「行歌坐夜」にも歌唱システムがあり、一定の手順を踏むことを原則とする。吳定国氏は、

喊門（門を開けてもらう）→進屋（部屋に入る）→探望（訪ねた目的を歌う）→勸唱（相手に歌を勧める）→盤問（相手の知恵を試す）→探情（相手の心を探る）→相愛（愛し合う）→想念（相手を思い続ける）→拆婚（相手を恋人と別れさせる）→逃婚（駆け落ち）→分散（別れる）⁽¹⁴⁾

との順序があるとし、吳浩氏と張澤忠氏は、

串寨歌（村を歩き回りながら唱う歌）→開門歌（開門の歌）→討凳歌（椅子を求める歌）→討水歌（水を求める歌）→初会（初めての出会い）→試探（相手の感情を探る）→謙讓（遠慮する）→交心（心を交わす）→結情（愛を結ぶ）→盟誓（誓約）→定情（結婚の約束）→分離（別れる）→送別（送別する）→邀約（次回会う約束）⁽¹⁵⁾

との程序があるとし、村を歩き回りながら唱う歌から始まり、途中には結婚の約束や誓約、最後は次に会う約束とさらに細かく分類している。こうした恋歌の定式の分類は民族や研究者によって多少の違いはあるものの、恋愛の過程の定式を踏むといった基本システムは共通しているといえる。

ここでは二〇〇六年十二月三十日に辰巳正明氏が団長として率いた貴州省侗族文化研究会の調査団が現地調査した「行歌坐夜」の一部始終を見てみたい。当時筆者も調査団のメンバーとして参加した。この活動は貴州省黎平県の岩洞村と竹坪村の交流活動の一環として行われた。岩洞村の男女が集団で竹坪村を訪れて、それから攔路歌、鼓楼対歌、行歌坐夜などの対歌活動が行われた。行歌坐夜は竹坪村のある民家で行われ、以下挙げる資料は竹坪村女性と黎平県岩洞村男性によって行われたものである。参加者の竹坪村の女性と岩洞村の男性はお互いに見知らぬ仲で、そのとき初めて会ったと聞いた。全部で五十一首の掛け合いが行われたが、その一部分を取り上げて流れを見てみたい。⁽¹⁶⁾ 歌番号はこの時歌われた歌の順番である。

最初は、岩洞村の男性数人が琵琶（侗族の楽器）や牛腿琴（侗族の楽器）を弾きながら竹坪村の女性数人が待っている家へ向かうことから始まる。家の門に到り門を叩くが、女性たちはすぐに門を開けようとしなない。すると男性は門前で、喊門歌の曲調で喊門歌を歌う。

（1）

開門吧、姑娘們

你為什麼不開門

不開門是想着你的丈夫呢

你的丈夫是人我們也是人

すると、女性たちは部屋の中から、

（2）

我們開門够不到

我家門門得很高

我們想開也我們也够不到

明天我叫父母把門開了

你們再來吧

門を開けてください、娘さんたちよ。

あなたたちはどうして門を開けてくれないのですか。

門を開けないのは、ダンナさんを思っているからではないですか。

あなたたちのダンナさんも私たちも同じ人間です。

私たちが門を開けようとしても、手が届きません。

門はとても高くて手が届かないのです。

私たちが門を開けようとしても、手が届きません。

明日、親にお願いして開けてもらいます。

その時にまたいらつしゃってください。

と喊門歌の曲調で返す。女性たちはわざと門が高いと口実をつけて、すぐには門を開けてくれない。この後に男性たちはもう一首歌ってすぐ女性たちのいる家に入ったが、門前で歌われる対歌は普通長く行われる。たとえば男性は断られると、「外はすでに風が吹き雨が降り始めました、私たちは薄着です、門の外に立たせないでください、冷たい風が吹いて全身が震えます」「今晚私たちは遠くからやってきました、ただ家に入って妹の歌を聞くためです」¹⁷、「私たちたちが来た道は本当に遠いです、山々を越えてまた河を渡りました。三十日、四十日もかかり、歩いて歩いて足裏は傷だらけです」などと、外が寒いか自分をはるばる遠くからやってきたことを訴える。妻問い習俗の対歌で、男性が山を越え河を越えて難渋しながらやって来たことをアピールするのは、そんなに簡単に自分を帰さないでほしいという切実な願いが込められていると同時に、女性に対して自分の真心を訴えることでもある。また、それぐらい女性は評判高い人であ

ることを意味するものである。女性は今夜は眠いとか様々な理由を作って男性を拒絶しながらも、男性の本当の目的を聞き出そうとする。要するに女性たちは男性の智慧や歌の能力を判断して、男性たちがうまく歌い返すことができると、女性たちは部屋に迎え入れることになる。

室内に入ってから小琵琶歌が歌われる。男性の一人が、

(5)

情伴、你生得好

妹よ、あなたはとても綺麗です。

我来找你坐一夜

私はあなたの所で今日一晩だけ居ます。

别人得你一辈子

他人はあなたと一生過ごすことを求めています、

我只得跟你坐一会

私はただしばらくここに居ることだけを望んでいるのです。

别人得你一起过日子

他人はあなたと一緒に生活することを求めています、

我只能聽你唱着歌

私はただあなたの歌を聞くことしかできません。

我是苦多甜少向你訴説

私の生活は苦勞が多く、楽しいことは少ないので私の思いを聞いてほしいのです。

と、相手を褒めながらここを訪ねた目的を歌う。この男性は女性集団に向かって歌いかけたので、女性集団の誰かが返すことによって対歌が成り立つ。この歌に対して女性集団の一人の女性が、

(6)

情哥你唱過了

兄よ、あなたは歌い終わりましたね。

我来返一首

今度は私が歌を返します。

哥哥生得漂亮

兄はとても格好良く、

我經常從遠處偷偷地看

私は遠くからいつも見えています。

不知多少回夢見你

夢の中で何度見たか知りません。

可是醒來得不到

目が覚めたらあなたはここにはいません。

你像天鷲在天上飛得很高

あなたは天鷲（白鳥）のように天上を高く飛んでいます。

我同你唱歌

私は一緒に歌うことはできますが、

但是不能一起飛

一緒に空を飛ぶことはできません。

不知你是不是有兩条命接在一起

あなたはいまもう一つの命と繋がっていませんか。

如果你還是單身一人

もしあなたが独身なら、

那我是单独一条繩

私は一本の縄ですので、

如果你真心笑意

もし誠意があれば、

那我們就捆在一起

私たちは一緒に縛られましょう。

と返す。同じく相手を褒めながら夢で何度も見たと愛の告白をし、さらに相手に妻がいるのではないかと探りを入れる。それから相手の心を探る探情の歌が歌われる。男性が無伴奏曲の河歌の曲調で、

(13)

水流下榕河

水は流れて榕河に入ります。

我約情妹水水下

私は妹と一緒に水の流れとともに流れます。

水到長安

水は長安まで流れて、

我是真心把你愛

私は本当にあなたを愛しています。

と愛の告白をすると、女性も河歌の曲調で、

(14)

水下榕河

水は流れて榕河に入ります。

我愿意同你順水下

私は水の流れに沿って一緒に行きたいです。

水下長安

水は長安へと下り、

我怕哥哥早已有了意中人

私はただ兄に恋人がいるのではと恐れます。

と返し、男性に恋人がいるのではないかと心を探る。こうした相手の本心を探る歌は、最初の大切な部分であることから、長く掛け合われた。女性が、

(28)

水下榕河

我等着你順水下

水下 nixia

我等你千年万年也無用

你還是別人的丈夫

と歌いかけると男性も、

(29)

你像魚兒游上河美麗又漂亮

但不知是別人的妻還是來和我

你若是我我好等

你若不是和我我好早離開

と返す。探情の歌では女性は終始自分には夫も恋人もないと歌いながらも、相手を他人の旦那さんと呼び、男性も同じく女性を他人の妻であろうと疑いをかけ、お互いに本心を探ろうとしている。このようにお互い慎重に相手の気持ちを探りながら、少しずつ相手の心を理解し、相手に近づいていくのである。(29) に対して女性は、

(30)

(道白) 別那麼說

水下榕河

我真的是等着你

水是榕河に流れ、

私はあなたを待ち、水の流れに沿ってゆきます。

水はニャーサ(地名)に流れ、

私があなたを千年万年待つても無駄でしょう。

あなたは相変わらず他人のダンナさんでしょう。

あなたは魚のように上流に泳いできて、美しく綺麗です。

しかし、他人の妻であるか、私と一緒にいるために来たのか分かりません。

もしあなたが私と一緒にいるために来たのであれば私は待ちます。

もしあなたが私と一緒にいるために来たのであれば、私は早く離れます。

(セリフ)「そんなことは言わないでください。」

水是榕河に流れ、

私は本当にあなたを待っていました。

我説的話却是真心話

私の言った言葉は本音であり、

像釘子一樣釘在木板上

釘を木の板に打ったように動きません。

と、自分の愛は本物の愛であると返し、ここから二人の關係は一氣に接近するのである。次に男性が、

(31)

(道白) 別那麼説

(セリフ)「そんなことは言わないでください。」

水下榕河

水は榕河に流れ、

你真的和我一起下

あなたが本当に私と一緒に行くのなら、

水下 lingdong

水がリントン（地名）に流れ、

我們把它当六洞

私たちはここを六洞と呼びましょう。

若你真心和我

もしあなたが本当に私と一緒にになりたいなら、

我就回家去叫先生翻書本

私は家に帰って吉日を定める先生に調べてもらい、

找個日子就成親

縁起の良い日を決めて結婚しましょう。

と求婚の歌を歌いかけると、女性は、

(32)

九十九条河

たとえ九十九本の河があっても、

我都愿意和你一起淌過

私はあなたと一緒に渡って行きたいです。

先生說過我的命運是嫁遠地方的

吉日を選ぶ先生は私の運命は遠くに嫁に行くといいました。

跟上了你我不会想家我会很快樂

あなたについて行ったら、私は家に帰りたいと思わず、楽しく暮らすでしょう。

と返し、相手の求婚を受け入れて、二人の關係はやつと愛の約束の段階に入り、一組のカップルが誕生することになる。女性はさらに、

(37)

我愛恋你情真真

私があなたを慕うのは本当です。

就像秤杆恋秤舵

秤杆和秤舵還有分離的時候

我和你相依六十年

秤的棹が、分銅を慕うようなものです。

棹と分銅は分かれることもあります、

私はあなたと六十年過ごします。

と、愛の誓いの歌を歌う。それからさらに男性が（38）で「昼間、あなたのことを思い、山に登り探し回りました。他人の妻が浮き草をすくい上げるのを見て、それがあなただと思いました。」と、相手を思い続ける歌を歌うと、女性も（39）で「私は本当にあなたを待っていました。あなたを待っていたから、まだ嫁にも行っていない。もし嫁に行っていたら、すでに子供がいて、大きくなって土を耕すことが出来るでしょう。」と歌い、愛を深める想念の歌を歌い交わし、途中で一回休憩に入った。休憩後、牛腿琴で伴奏する牛腿琴歌が始まった。女性が、

（49）

情伴人好生在那遙遠的地方

隔三重嶺五重山

你在那個地方

娶到那個地方的姑娘做妻子

和我們唱歌你不開心

和我們說話你臉上有愁雲

我勸你回家

和你妻子分手你敢嗎

あなたはとても良い人で、遠い所の、

三つの峰と五つの山を隔てた所で生まれ、

あなたはそこで、

その村の女性を嫁にもらい、

私たちと歌を歌っても、あなたは楽しくなく、

私たちと一緒に語り合うとあなたの顔に憂いが見えます。

私はあなたが家に帰り、

妻と別れることを勧めますが、あなたは出来ますか。

と、「遠い所の三つの峰と五つの山を隔てた所で生まれ」と、二人が遠く離れた処に住んでいることを歌うことで一緒になることが可能かを探り、さらに妻と別れることを勧め、男性の本気度を確かめようとする内容である。侗族の対歌において男女は常に「人の旦那さん」、「人の妻」と設定されているが、これは古い婚姻の仕来りといわれている⁽¹⁸⁾。結婚は「姑表親」（娘は必ず母方のおじさんの息子と結婚しなければならず、男性は必ず父方のおばさんの娘を嫁にもらわなければならない）、または「父母之命、媒妁之言」によつ

て自分の意思とは拘らずに、すでに結婚すべき相手が決まっている。それゆえに男女はたとえ相手が未婚であることを知りながらも、人の旦那、人の妻と呼びかけるが、これはまた相手への尊称であるともいわれる。⁽¹⁹⁾ なぜならば、早く結婚して人の旦那、人の妻になったか
らには、それぐらい才色兼備の人であることを意味するからである。女性の歌に対して、続いて男性は、

(50)

情伴你生得好我命不帶你

就像青藤不帶樹

都說結伴成親命中注定

我不相信我的命運不帶你

父母許配我不樂意

才四処出来今天找到你

あなたはとても美しい方ですが、私はあなたと一緒にいられない運命です。

それは青藤が木から離れたようです。

みんな結婚は定めだといいますが、

私は信じません、あなたと一緒にいられない運命を。

親が取り決めた婚姻を、私は快く思っていない。

それで出てきて今日あなたに逢えました。

と、「親が取り決めた婚姻を私は快く思っていない」と歌いながら、女性に積極的に駆け落ちをしようとは誘わない。二人の関係はここで終わったことになる。その後、鶏肉の粥が出されて皆に振る舞われた。女性の作ったお粥を食べながら、男性は以下の歌を歌う。

(51)

今天到来真把你們操煩了

又吵又鬧你們家老人坐不安

還煮了雞肉稀飯真是又香又甜

情意綿綿我記在心間

今日私たちがやってきて、迷惑を掛けました。

騒いだりして老人たちも落ち着かなかったことでしょう。

また鶏肉のお粥を作ってもらい、本当に香ばしくて甘く、

私たちの感情はいつまでも長く続き、私はずっと心の中に記します。

最後は男性側がお礼の歌を歌い、ここで「行歌坐夜」は終了した。最後のお礼の歌は場を締めくくる終わりの歌である。

この時の対歌は喊門（門を開けてもらう）―探望（訪ねた目的を歌う）―探情（相手の心を探る）―相愛（愛し合う）―定情（結婚の約束）―盟誓（誓約）―想念（相手を思い続ける）―拆婚（相手を恋人と別れさせる）―分散（別れる）の手順で行われたが、もちろんすべての「行歌坐夜」が毎回必ずしもこの手順で行われるとは限らない。どの部分から始まり、どの部分で終わるのかは毎回異なるが、

恋愛の過程を踏む対歌の基本システムは変わらない。つまり対歌は必ず歌の定式といった歌路に沿って行われるということである。

四 おわりに

ここで湯原王と娘子の贈答歌に戻って、「行歌坐夜」の対歌と照らし合わせてみると次のように対応していると思われる。

門前の歌	――	①
探望の歌	――	② ③
探情の歌	――	④ ⑤
定情の歌	――	⑥ ⑦
想念の歌	――	⑧ ⑨ ⑩
分散の歌	――	⑪
お礼の歌	――	⑫

湯原王が①で遠い家路を帰してしまう状況を詠むのは、「行歌坐夜」の喊門の歌と対応する。湯原王がここで門前で断られる状況を詠むのは、妻問い習俗の門前の場面を設定して相手の歌を引き出そうとしたと考えられる。『万葉集』には湯原王の①が最初の歌に配列されており、最初の歌とも考えられるが、対歌の流れからすると、湯原王が歌い掛けたことに対して娘子が断るといった、内容の歌がすでに掛け合われてから、この歌が詠まれた可能性もある。②は手に取るできない得がたい女性を詠み、相手を賛美することであり、これは探望の歌と対応する。湯原王の①②の歌は女性集団に対して贈ったと思われる、娘子が答え返したことによって、湯原王と娘子との一対一の贈答が成り立ったと思われる。娘子が③で夢にあなたが見えたと言ったのは、「行歌坐夜」の(6)で女性が男性を何度も夢に見たと答える内容と類似し、愛を受け入れているかのように見える、探望の段階の挨拶的な歌と考えられる。④は相手の妻を設定し、相手の心を探る探情の段階の歌で、⑤はその探情の歌に返したものである。⑥⑦の形見の交換は、愛の約束を交わした定情の部分と対応し、⑧⑨⑩は思い続ける想念の部分と対応する。⑩の湯原王の物理的な遠い距離から二人の関係を終らせようとする歌い方は、「行歌坐

夜」の(49)の初めの部分と類似し、そこから二人の関係は別れへと向かうわけである。その⑩を受けて⑪で二人は別れへと向かい、こは分散の歌と対応する。⑫で恋の思いを振り返りながら嘆く気持ちで歌群を閉じることは、「行歌坐夜」で最後にお礼をいい、二人の感情を心に記すと歌うのと対応し、歌の場を締めくくる挨拶的な歌とも捉えられる。

侗族の「行歌坐夜」で歌われる恋歌は歌路によって生み出されており、こういうシステムからは、湯原王と娘子の十二首の贈答歌群も同様に、歌の定式といった歌路に沿って歌を贈答していることが確認できる。『万葉集』に収録されている贈答歌は編纂者の手を経て今の形になっており、編纂者が意図的に配列した可能性は高いものの、ここに歌掛けの方法を受け継いだ恋歌の定式、歌路が存在するという事実は否めないであろう。いわば歌路の断片断片によって、二人の贈答歌が形成されていることが認められるのである。贈答歌についてはさらに検証しなければならないが、これは『万葉集』の贈答歌だけの問題ではなく、一首一首恋歌の生成の問題と大きく関わる問題であり、今後さらに考察していきたいと思う。

注

- (1) 中西進『万葉集 全訳注・原文付』講談社文庫) による。以下、歌の引用はこれによる。
- (2) 土屋文明『万葉集私注』二(筑摩書房、一九六九年)。
- (3) 伊藤博『万葉集私注』二(集英社、一九九六年)。
- (4) 渡辺護『湯原王と娘子の歌』『万葉集を学ぶ』第三集(有斐閣、一九七八年)。
- (5) 辰巳正明『万葉集恋歌の再分類と復元の試み』『詩の起原 東アジア文化圏の恋愛詩』(笠間書院、二〇〇〇年)。
- (6) 佐野あつ子『恋の歌遊び——対詠歌の方法』『女歌の研究』(おうふう、二〇〇九年)。
- (7) 注5参照。
- (8) 『契沖全集 万葉代匠記』(岩波書店)。
- (9) 辰巳正明注5、及び佐野あつ子注6参照。
- (10) 拙稿「万葉集と門前の歌—欄門の習俗との関わりから—」『國學院雑誌』第一一六卷第一号(二〇一五年一月)。

- (11) 辰巳正明「恋情歌の定式と歌路」『万葉集と比較詩学』（おうふう、一九九七年）。
- (12) 辰巳正明「歌路―中国西南少数民族の歌唱文化」注5参照。
- (13) 『侗族文学史』（貴州民族出版社、一九八八年）。
- (14) 呉定国「中国貴州省侗族の婚姻習俗と行歌坐夜―対面歌唱システムを中心に―」平成一七年度國學院大學特別推進研究助成金研究成果報告書『東アジア圏における対面歌唱 システムに関する形成過程の研究』（國學院大學）。
- (15) 呉浩、張澤忠『侗族歌謡研究』（広西出版社、一九九一年）。
- (16) 「行歌坐夜」の資料は、平成一八年度～平成二〇年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書『東アジア圏の歌垣と歌掛けの基礎的研究』、研究代表者辰巳正明（二〇〇九年三月、國學院大學）による。
- (17) 楊国仁編『侗族坐夜歌』（貴州人民出版社、一九八八年）。
- (18) 竜耀宏・竜宇暁編『侗族大歌・琵琶歌』（貴州人民出版社、一九九七年）。
- (19) 注18参照。